

『竹取物語』「竜の頸の珠」難題譚の方法

——『史記』撰取の実相とその改変——

伊 澤 美 緒

はじめに

『竹取物語』の求婚難題譚とは、かぐや姫に求婚する貴公子たちを主人公とする五つの小話をいう。本稿ではその第四番目にあたる「竜の頸の珠」難題譚、すなわち大納言大伴御行を主人公にし、「竜の頸の珠」を難題とする小話を取り上げる。

本話において、かぐや姫が大伴御行に課した難題物は「竜の頸の珠」であった。「竜の頸の珠」という難題物の出典は古注をはじめ、多くの先行研究が指摘するように、『莊子』とすることに疑問はない。ところが、『莊子』での「竜の頸の珠」は容易に入手できる宝とされているにも関わらず、『竹取物語』におけるそれは、入手不可能な宝へと変質してしまっている。確かに、『竹取物語』のストーリー展開上「かぐや姫との結婚を実現させない」ために難題物は入手不可能でなければならぬ。しかし、そうであるならば最

初から入手不可能な難題物を設定すればよいのではないか。「竜の頸の珠」という入手可能な宝が、入手不可能な宝へ変質した理由とするにはいささか不十分といえよう。「竜の頸の珠」の変質を招いたものは一体なにか。

本稿では、この疑問に対する解答として『史記』「秦始皇本紀」からのモチーフ撰取を指摘する。「竜の頸の珠」難題譚と「秦始皇本紀」を比較検証して、その撰取の実相を明らかにし、その上で『竹取物語』の典拠利用の方法について述べるものである。

なお、既に『竹取物語』の『史記』「秦始皇本紀」撰取を指摘する網谷厚子氏の論がある。本稿はそれを否定するものではなく、氏の指摘と本稿のそれは多くの点で共通する。ただし、結論部分では少なからず隔たりがあり、それについては以下、随時指摘してゆくことにする。また、網谷氏は両者（『史記』「秦始皇本紀」と『竹取物語』「竜の頸の珠」難題譚）の記述・構成の類似・共通点を主に

指摘するが、本稿は近似する両者の相違点にも言及することとした。
い。

一 「竜の頸の珠」という宝

(1) 「竜の頸の珠」の性格

「竜の頸の珠をとる」(行為は、「きわめて危ない冒険をすることのたとえ」「非常な危険をおかすこと」を意味する成語にもなっており、十分に知られたな故事であるといつてよい。原典は、『莊子』雑篇「列禦寇」第三十二に求めることができる。

有_下見_上宋王者、錫_二車十乘_一。以_二其十乘_一禪_二莊子_一。莊子曰、河上有_下家貧、恃_二緯蕭_一而食者_上。其子没_二於淵_一、得_二千金之珠_一。其父謂_二其子_一曰、取_レ石来鍛_レ之。夫千金之珠、必在_二九重之淵、而驪龍領_下。子能得_レ珠者、必遭_二其睡_一也。使_二驪龍而寤_一、子尚奚微之有哉。今宋国之深、非_二直九重之淵_一也。宋王之猛、非_二直驪龍也_一。子能得_レ車者、必遭_二其睡_一也。使_二宋王而寤_一、子為_二齧粉_一矣。(新釈漢文大系『莊子』下^③)

「竜の頸の珠をとる」という成語は、莊子の語ったたとえ話による。莊子は宋王から車を賜り有頂天となっている男に対し、それがいかに危険なことであるのかを説いたのである。このたとえ話からは、以下の三点が読み取れる。

①入手の容易さ

「珠」の入手方法は「子、淵に没して、千金の珠を得。」(傍線部ア)というものであった。「珠」を水底から拾い上げた子は、一攫千金を夢見て：つまり「珠」を探し求めて淵に入ったわけではない。潜つたら偶然見つけた。思いがけずに拾った。それが「千金の珠」(驪龍領下の珠・竜の頸の珠)であったのである。つまり『莊子』において「珠」は、苦勞する必要のまったくない、実に容易に入手できる宝として設定されている。

②入手成功の理由

さて、「千金の珠」を見た父親は、それが「驪龍領下の珠(竜の頸の珠)」であることを見抜ぬく。そして、子が容易に入手できたその理由を「必ず其の睡りに遭ひたればなり」(傍線部イ)と説明した。つまり、入手成功のカギは「竜の眠り」にあったのである。

③所有の危険

「珠」を見た父親は言う、「石を取り来りて之を鍛け」(傍線部ウ)。彼は、直ちに「珠」を手放せと命じたのである。竜が眠っていたからこそ入手できた「珠」である。「驪龍をして寤めしめば、子尚ほ奚の微か之有らん(もしも黒竜が目を覚ましたら、お前のからだは何も残らず食われてしまうだろう)」(傍線部エ)と、父は竜が目覚めた後を危惧する。つまり「珠」を所有し続けければ、身を滅ぼすという理解が示されているのである。

したがって、『莊子』における「竜の頸の珠」とは、〃入手する

ことは容易であるが、放棄せねばならぬ宝」として設定されているといえる。

次に『竹取物語』における「竜の頸の珠」についても同様に確認しておく。

かぐや姫の難題は以下の通りであった。

A. かぐや姫、「石作の皇子には、仏の御石の鉢といふ物あり。それを取りて賜へ」と言ふ。「庫持の皇子には、東の海に蓬菜といふ山あるなり。それに銀を根とし、黄金を茎とし、白き珠を実として立てる木あり。それ一枝、折りて賜はらむ」と言ふ。

「いま一人には、唐土にある火鼠の皮衣を賜へ。大伴の大納言には、竜の頸に五色に光る珠あり。それを取りて賜へ。石上の中納言には、燕の持たる子安貝、取りて賜へ」と言ふ。⁴⁾

二重傍線部が大伴御行に対するかぐや姫の要求である。しかし、ここからは難題物の形状・所在（難題物「珠」、形状「五色に光る」、所在「竜の頸」）以外の情報はよみとることができない。そこで更なる手掛りを「竜の頸の珠」難題譚の本文に求めることにする。最初の手掛りは、難題譚冒頭にみることが出来る。

B. 大伴御行の大納言は、わが家にありとある人あつめて、のたまはく、「竜の頸に五色の光ある珠あり。それをとりて奉らむ人には、願はむことかなへむ」とのたまふ。男ども、仰せのこゝとを承りて申さく、「仰せのことは、いとも尊し。ただし、この珠、たはやすくえ取らじを。いはむや、竜の頸に、珠はいか

が取らむ」と申しあへり。

破線部は本文Aと同じ情報の繰り返しである。注目すべきは、傍線部①の家臣の言葉である。「竜の頸の珠」は「たやすくは入手できない」ものであるという。では、「たやすく入手できない」「竜の頸の珠」をどうやって手にいれるのか。その方法は、家臣たちを待ちきれず難波の港に赴いた大伴御行と船人との会話部分に明らかにされる。

C. 遣はしし人は、夜昼待ち給ふに、年越ゆるまで音もせず。心もとながりて、いと忍びてただ舍人二人、召継として、やつれ給ひて、難波の辺におはしまして、問ひ給ふことは、「大伴の大納言の人や、船に乗りて、竜殺して、そが頸の珠取れるとや聞く」と問はするに、船人、答えていはく、「あやしき言かな」と笑ひて、「さるわざする船もなし」と答ふるに、をちなき事をする船人にもあるかな。え知らで、かく言ふと思して、「わが弓の力は、竜あらば、ふと射殺して、頸の珠は取りてむ。遅く来る奴ばら待たじ」とのたまひて、海ごとに歩き給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出で給ひぬ。

ここで御行は、「竜の首の珠を取るためには竜を殺す必要がある」（傍線部②③）と二度にわたって発言しているが、「竜を殺して」という方法ゆえに、「たやすくは入手できない」ことがここから分かるのである。この後、大伴御行は暴風雨に遭遇し、「竜の頸の珠」の入手を断念する。結局、「珠」を入手することはできない。

『莊子』の「竜の頸の珠」は、^レ入手することは容易であるが、放棄せねばならぬ宝^ニであった。対する『竹取物語』のそれは、^レ入手すること自体が困難であり、入手不可能な宝^ニであって、両者は明らかに性格を異にする。「竜の頸の珠」という名前こそ『莊子』と変わらぬが、明らかに変質してしまっているのだ。

(2) 付加されたモチーフ

『竹取物語』において「竜の頸の珠」を変質させたのは、『莊子』にはないモチーフが付加された結果と考えられる。では、付加されたモチーフとは具体的に何か。それは「形状」と「入手方法」の二点である。『莊子』では形状に関する記述は見られず（単に「千金之珠」とされる）、また入手方法も先に確認した通り「淵に潜ったら偶然見つけた」というものであった。一方『竹取物語』においては、「五色に光る」という形状の特徴が、そして「竜を殺す」という入手方法が、新たに提示されている。

以下、「形状」と「入手方法」という二つのモチーフについて検討する。

① 「形状」について

「五色に光る」という形状のモチーフについては、網谷厚子氏による研究⁵⁾がある。氏は「五色の玉」とは、『論衡』「卒生」第八の記述から「人工的に製造されうる」実在物であるが、それが竜の頸に光っているという条件は現実的にありえず、そのために『竹取物

語』の「竜の頸の珠」は入手不可能であるという。

実際に『論衡』の記述を確認しておく。

天道有^レ真偽^一。真者固自與^レ天相應、偽者人加^レ知巧^一、亦與^レ真者^一無^レ以異^一也。何以驗^レ之。禹貢曰、璆琳琅玕。此則土地所^レ生真玉珠也。然而道人消^レ礫五石^一作^レ五色之玉^一、比^レ之真玉^一、光不^レ殊別^一。兼魚蚌之珠、與^レ禹貢璆琳^一、皆真玉珠也。

然而随候以^レ葉作^レ珠、精耀如^レ真、道士之教至、知巧之意加也。（新釈漢文大系『論衡』^上）

ここでは、本物の玉珠（玉^ニ土地から生じるもの珠^ニ天然に採れるもの）の光と、偽物（人工物）であっても「道士（作り手）の教至り、知巧の意」が加わった玉珠の光は区別することができないと説かれている。つまり、「五色の玉」とは「五石を消礫して」作った人工の玉ではあるが、本物の玉珠と見分けることが出来ないという文脈なのである。したがって、記述がなくとも本物の玉珠（真玉珠）の形状は「五色に光る」ものであったと考えるべきであろう。

ゆえに「五色に光る」という形状上のモチーフが「竜の頸の珠」を入手不可能な宝に変質させたとは判じ難い。

② 入手方法について

大伴御行が「竜の頸の珠」の入手を断念せざるを得なくなった理由は、嵐との遭遇によるものであった。それは、長年にわたって航海をしてきた楫取でさえ遭遇したことのない未曾有の大嵐である。

この嵐への対処を質問した御行に対し、楯取は以下のように答える。

D. 楯取、答へて申す。「神ならねば、何わざをか仕うまつらむ。

風吹き浪激しけれども、雷さへ頂に落ちかかるやうなるは、竜を殺さむと求め給へば、あるなり。疾風も竜が吹かするなり。

はや、神に祈り給へ」と言ふ。「よき事なり」とて「楯取の御神、聞こしめせ。をぢなく、心幼く、竜を殺さむと思ひけり。

今より後は毛の一筋をだに動かし奉らじ」と、寿詞放ちて、立ち居、泣く泣く呼ばひ給うこと、千度ばかり申し給ふけにやあらむ。やうやう雷鳴りやみぬ。少し光りて、風はなほ疾く吹く。楯取のいはく、「これは、竜のしわざにこそありけれ。…」

楯取は、御行が「竜を殺さむと求め」たから大嵐に襲われたと考えている。激しい風は「竜が吹かす」ものであり、嵐は「竜のしわざ」によるものなのである。つまり、「竜を殺そうとした」ために「竜が嵐をおこした」のであり、ために御行は「竜の頸の珠」の入手を断念せざるを得なかったのだ。

したがって、この新たに加えられた「竜を殺す」という方法、すなわち「障害物を力によって排除する」というモチーフこそが、『竹取物語』の「竜の頸の珠」を入手不可能な宝へ変質させた要因として認められるのである。

『竹取物語』「竜の頸の珠」難題譚の方法（伊澤美緒）

二 『史記』撰取の実相

『史記』「秦始皇本紀」の該当箇所を次に示す。

方士徐市等入海求神藥、數歲不得。費多。恐譴、乃詐曰、蓬萊藥可得。然常為大鯨魚所苦。故不得至。願請善射與俱。見則以連弩射之。始皇夢與海神戰、如人狀。問占夢博士。曰、水神不可見。以大魚蛟龍為候。今上禱祠備謹。而有此惡神、當除去。而善神可致。

乃令入海者齋補巨魚、具、而自以連弩候大魚出射之。自琅邪北至榮成山。弗見。至之罘、見巨魚。射殺一魚。遂竝海西至平原津而病。始皇惡言死。羣臣莫敢言死事。上病益甚。…中略…七月丙寅、始皇崩於沙丘平臺。(新釈漢文大系『史記』(本紀)七)

始皇帝は「蓬萊藥（不死藥）」を入手すべく、（徐市曰く）その妨げである「大鯨魚（巨魚）」を探し出して、「連弩（石弓）」で「射殺」した。大伴御行は「龍の頸の珠」を入手すべく、その妨げとなる「龍」を探し、「弓」で「射殺」しようとした。網谷氏が五つの類似点を挙げ、『竹取物語』作者が、『史記』秦始皇本紀第六のこの箇所をふまえて、大伴の大納言の漂流譚を書いた可能性もあると考えられる」と指摘するように、前掲『史記』本文と本話（竜の

頸の珠難題譚」の酷似は甚だしい。

両者はいずれも、主人公（始皇帝）・「大伴御行」自らが、目的物（蓬莱菜）・「龍の頸の珠」を手に入れるために、海へ漕ぎ出し、主人公自らの手（武力）で目的物入手の障害（大鯨魚）・「龍」を排除した（しようとした）物語である。これほど多くの類似が認められるのに、何故これまでの諸注釈が『史記』「秦始皇本紀」を典拠として指摘しなかったのだろうか。また、網谷氏が可能性の指摘に留めたのは何ゆえだろうか。

それは恐らく、根拠の弱さ、乏しさゆえであろう。前掲箇所の種類だけでは偶然の一致の可能性も否定できない。「驪龍領下の珠」と「龍の頸の珠」のような直接的な結びつきが見出せない以上、出典として認定するためにはさらに多くの根拠を提示する必要がある。『莊子』には無かった「龍を殺す」という方法、「障害物を力によって排除する」というモチーフは「秦始皇本紀」からの撰取とみなし得るのか。以下、両者の本文を具体的に検証し、その類似を指摘していきたい。

(1) 記事の類似

「龍の頸の珠」難題譚と「秦始皇本紀」とを詳細に比較すると、始皇帝即位から死去までの間に集中して、多くの類似記事が確認できる。

紀元前二二一年、秦王政は天下統一を果たし、その二年後皇帝に

即位した。王在位二十八年目のことであったと『史記』は記述する。皇帝即位から死去までの記事を簡条書きにまとめると以下の通りとなる。（なお、アラビア数字は王在位年数を示すものであり、また三十七年の記事は前掲の『史記』「秦始皇本紀」本文と同じ箇所である。）

■「秦始皇本紀」の記事の流れ

- 28年 秦王、皇帝即位。諸国巡遊（琅邪台に建碑）。齊人徐市、上書。（↑a）
- 29年 東遊（陽武、博狼沙で盜賊に遭遇・之栗山に建碑）。
- 31年 十二月の名称を臘から嘉平に改める。人民に米と羊を給付。咸陽で盜賊に遭遇。
- 32年 碣石山へ行幸（碣石門に碑文）。燕人盧生、仙人搜索。（↑b）
漢終候公石生、仙人の不死薬を搜索。（↑c）北遊。盧生、録圖書を上奏。將軍蒙恬を派遣し、胡人を討つ。
- 33年 嶺南地方を攻略、南海三郡を置く。西北方の匈奴を駆逐。三十四県を置く。將蒙恬を派遣し、高闕山・陶山・北仮を征服。
- 34年 焚書坑儒。
- 35年 道路整備（九原↗雲陽）。阿房宮造宮。（↑d）盧生の進言。（↑e）候生・盧生、始皇帝を誇り逃亡。（↑f）
長子扶蘇を北方へ左遷。

36年 隕石落下（始皇帝に死の予言）。

37年 諸国巡遊（会稽山に建碑）。

徐市、蓬萊山未到達の理由を大鮫魚出現のためと偽る。

始皇帝、海神と戦う夢を見る。大鮫魚を射るため船出。

各地を探し歩く。（↑g）之果において大魚を射殺。平原・津にて発病。（↑h）沙丘・平台にて死去。

右のうち、a、s、hの記号を付した記事に、「龍の頸の珠」難題譚との類似が指摘できるのである。それは「①家臣の派遣」「②行動制限」「③家臣の誘りと離反」「④豪邸の造営」「⑤障害物の排除」「⑥発病」（以上の見出し語が伊澤が適宜付したものの）という六項目にも及ぶことになる。次に掲げる「本文対照表」により順に確認することにする。（なお、①⑤⑥については網谷氏の指摘がある。）

■本文対照表

③家臣の誘りと離反	②行動制限	①家臣の派遣	
<p>おのおの仰せ承りてまかりぬ。『龍の頸の珠取り得ずは、帰り来な』とのたまへば、いづちもいづちも、足の向きたらむ方へ往なむず。『かかるすき事し給ふこと』とそしりあへり。賜はせたる物、おのおの分けつつ取る。あるいはおのが家に籠り居。あるいはおのが家まほしき所へ往ぬ。『親・君と申すとも、かくつきなきことを仰せ給ふこと』と事ゆかぬものゆゑ、大納言をそしりあひたり。</p>	<p>「この人々帰るまで、齋ひをして、われはをらむ。この珠取り得ては、家に帰り来な」とのたまはせけり。</p>	<p>大納言、見笑ひて、「汝らが君の使と、名を流しつ。君の仰せ言をば、いかかは背くべき」とのたまひて、龍の頸の珠取りにとて出だし立て給ふ。</p>	<p>「龍の頸の珠」難題譚（『竹取物語』） 大伴御行の大納言は、わが家にあるとある人あつめて、のたまはく、「龍の頸に五色の光ある珠なり。それをとりて奉らむ人には、願はむことかなへむ」とのたまふ。 …中略… 大納言、見笑ひて、「汝らが君の使と、名を流しつ。君の仰せ言をば、いかかは背くべき」とのたまひて、龍の頸の珠取りにとて出だし立て給ふ。</p>
<p>f 候生・盧生相與謀曰、始皇為一人、天性剛戾自用。紀諸侯一井二天下、意得欲從、以為、自レ古莫及己。專任獄吏、獄吏得親幸。博士雖七十人、特備員弗用。……中略……天下之事無二小大、皆決於上。上至下以衡石一量と書。日夜有呈。不レ中呈、不レ得休息。貧於權勢、至レ如此。未レ可為求仙藥。於是乃亡去。</p>	<p>e 盧生說始皇曰、臣等求芝・奇藥・仙者、常弗遇。類物有書之者。方中人主時為微行、以辟惡鬼。惡鬼辟、真人至。人主所居、而人臣知之、則書之於神。真人者入水不濡、入火不熱、凌雲氣、與天地久長。今上治天下、未能活彼。願上所居宮、毋令二人知。然後不死之藥殆可得也。</p>	<p>c b a 齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊・方丈・瀛州。僊人居之。請得齋戒、與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人。 三十二年、始皇之碣石、使燕人盧生求羨門高（密）。因使韓終、公生求仙人不死之藥。</p>	<p>「秦始皇本紀」（『史記』） 齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊・方丈・瀛州。僊人居之。請得齋戒、與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人。 三十二年、始皇之碣石、使燕人盧生求羨門高（密）。因使韓終、公生求仙人不死之藥。</p>

<p>④豪邸の造営</p> <p>「かぐや姫すゑむには、例やうには見にくし」とのたまひて、麗しき屋を作りたまひて、漆を塗り、蒔絵して壁し給ひて、屋屋の上には糸を染めて色々言かせて、内々のしつらひには、言ふべくもあらぬ綾織物に絵を描きて、間ごと貼りたり。</p>	<p>⑤障害物の排除</p> <p>「わが弓の力は、竜あらば、ふと射殺して、頸の珠は取りてむ。遅く来る奴ばら待たじ」とのたまひて、海ごとに歩き給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出て給ひぬ。 *未遂</p>	<p>⑥発病</p> <p>三、四日吹きて、吹き返し寄せたり。浜を見れば、播磨の明石の浜なりけり。大納言、南海の浜に吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、息づき伏し給へり。 ……中略…… 松原に御筵敷きて、おろし奉る。その時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、からうして起き上がり給へるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふくれこなたかなたの目には季を二つつけたるやうなり。</p>
<p>d</p> <p>於_レ是始皇以為、咸陽人多、先王之宮廷小。吾聞、周文王都_レ豊、武王都_レ鎬。武_・鎬之間、帝王之都也。乃宮_レ作朝宮渭南上林苑中。先作_レ前殿阿房。東西五百步、南北五十丈。上可_レ以坐_レ萬人、下可_レ以建_レ五丈旗。周馳_レ為_レ閣道、自_レ殿下直抵_レ南山。表_レ南山之顛以為_レ闕。為_レ復道、自_レ阿房渡_レ渭、屬_レ之咸陽、以象_レ天極閣道絕_レ漢抵_レ宮室也。阿房宮未_レ成、成欲_レ更擇_レ令_レ名_レ之。作_レ宮阿房。故天下謂_レ之阿房宮。</p>	<p>g</p> <p>乃令_レ入_レ海者齋中捕_レ巨魚一具、而自_レ以_レ連弩候_レ大魚出_レ射_レ之。自_レ琅琊北至_レ榮成山。弗_レ見_レ至_レ之采、見_レ巨魚。射_レ魚。 *完遂</p>	<p>h</p> <p>遂_レ泣_レ海西至_レ平原津_レ而病。始皇惡_レ言_レ死。羣臣莫_レ敢言_レ死事。上病益甚。</p>

まず、「①家臣の派遣」について。上段は「竜の頸の珠」難題譚冒頭部である。ここで、大伴御行は、彼の支配下にある者の全て

（「ありとある人」）に「竜の頸の珠」の入手を命じ、旅立たせている。下段「秦始皇本紀」の始皇帝も、目的物は「仙人（もしくは不死薬）」と異なるが同様の命令を下している。始皇帝はそれぞれ、a 徐市、b 盧生、c 韓終公の公石生と、三度も繰り返し家臣を派遣している。ここに家臣を派遣することによって目的物の入手を図るという共通点が見出せよう。

次いで「②行動制限」という類似であるが、少々補足を加えて述べたい。上段は御行の発言である。彼は、家臣が戻るまで「齋ひ」をして待つと宣言した。「齋（いもひ）」は、「ものいみ」「精進潔齋」を意味する。御行は家臣たちの「竜の頸の珠」入手を祈念して、自らに「行動制限」を課したとみることができ。では、始皇帝はどうか。下段 e の記事は、家臣の盧生の発言である。盧生は「長年にわたって仙人や不死薬を搜索しているのを見つからない。これは何者かが妨害しているせいだ。天子の所在を人臣が知るとその神気が害されてしまうので、所在を人に知られぬようにするべきである。そうしてはじめて、不死の薬を手に入れることができる」と主張した。これを受けて、以後始皇帝は徹底して自らの所在・行動を隠した生活を送るのである。他者からの要請とはいえ、始皇帝は目的物の入手のために「行動制限」を了承し実行したのであるから、これについても両者は近似しているとみなせよう。

「③家臣の誇りと離反」とは、両者の家臣がそれぞれに主人への不満を述べ、主従関係を放棄するというものである。「竜の頸の

珠」難題譚では、家臣らは御行に対し「かかるすき事し給ふこと」と不満を口にし、誰一人としてその命令を果たす者はない。御行から支給された品物を山分けして着服し、家に籠もったり、行きたいところに行ってしまう家臣たちの行動は御行からの離反とみて差し支えなからう。一方、「秦始皇本紀」においても、皇帝の「人となり」刑罰の厳しさ「独裁政治」に対する逐一の不満が語られた後、「仙人（不死薬）」搜索の筆頭であった盧生が逃亡するという記事がある。盧生は侯生とともに始皇帝を非難し、その上で「未だ為に仙薬を求む可らず（とうてい仙薬を求め得ることなどはできない）」と、始皇帝を見限ってしまうのだ。

次に「④蒙邸の造宮」という類似がある。大伴御行はかぐや姫を迎えるために「麗しき屋」をつくり、始皇帝は壮大な宮殿（阿房宮）の建設に着手する（記事d）。規模の差はあるが、見事に一致しているといえよう。

「⑤障害物の排除」について。上段「竜の頸の珠」難題譚では未遂に終わっているが、下段「秦始皇本紀」において、始皇帝は「巨魚」を探し当てこれを射殺している（元遂）。とはいうものの、障害物と考えられた「巨魚・大鮫魚」を排除しても結局目的の「不死薬」は手に入れられなかったのであるから、やはり御行と重なり合うといえる。また「弓」と「弩」というほぼ同一兵器によって自ら障害物の排除を試みている点においても、一致と判断して差し支えなからう。

『竹取物語』『竜の頸の珠』難題譚の方法（伊澤美緒）

最後が「⑥発病」の類似である。上段では、明石の浜に漂着した御行の病に冒された姿が「風いと重き人にて、腹いとふくれこなたかなたの目は李を二つつけたるやうなり」と詳しく描写される。自ら歩くこともままならぬ様子であり、重病を患ったと推せられる。一方、下段「秦始皇本紀」では、「平原津に至りて病む」と極めて簡潔である。その病がどのようなものであったかは知る由もないが、「羣臣、敢へて死の事を言ふもの莫し。」との一文から、すでに発病時には「死」の予感があったようである。御行も始皇帝も、長い航海を終えた直後の「発病」であり、これも一致点と認められる。「発病」以降の両者相違については、次章で改めて論じることにする。

また、このほかに庫持皇子を主人公とする「蓬萊珠の枝」難題譚にも一部「秦始皇本紀」との類似がみられる。庫持皇子に課された難題物は「蓬萊の珠の枝」であり、この出典には「列子」「湯問」が指摘されている。確かに「湯問」は、蓬萊山を含む五山の名、そこに仙人が住むこと、玉の木（珠玕之樹）が生えていることの記述を有しており、「蓬萊の珠の枝」という難題物の出典であることに疑いはない。しかし、「湯問」の蓬萊山は「物の巨細、長短、同異の有無」という湯王の問に対する返答の中に語られるにすぎない。実際に蓬萊に行き「仙人（不死薬）」を手に入れようとしたのは、始皇帝の家臣である徐市がその最初である。その姿は「蓬萊の珠の枝」を手に入れるため、蓬萊へ行く（と見せかけた）庫持皇子と重

なるものだ。徐市は結局、蓬萊を見つけないことが出来ず、始皇帝に対し「蓬萊の薬、得可し。然れども常に大鯨魚に苦しめらる。(蓬萊薬可得。然常為大鯨魚所苦)」と虚偽の報告をする。捏造した自身の冒険を語り言葉巧みに欺くという行為も、庫持皇子のそれと共通するといえよう。

(2) 人物造型の類似 —— 始皇帝と大伴御行 ——

次に、『史記』に語られる始皇帝、『竹取物語』に語られる御行についてそれぞれ検証する。

『史記』「秦始皇本紀」における始皇帝は、「天下統一を実現させた軍事力(武力)」の持ち主であり、「皇帝独裁」を強いる「支配者」である。諫言に耳を貸さず(始皇帝の長子・扶蘇は、父へ諫言したため左遷されている)、万里の長城や新都造宮ための大規模な土木工事や、焚書坑儒を断行した彼は「独断専行」の人物といえる。その人となりについて、「秦始皇本紀」は以下のふたつの人物評を載せている。

○秦王為_レ人、蜂準長目、鵞鳥膺、豺声、少_レ恩而狼虎心。

○始皇為_レ人、天性剛戾自用。起_二諸侯_一并_二天下_一、意得欲従、以_レ為、自_レ古莫_レ及_レ己。

前者は秦王時代に尉繚が述べたもの、後者は盧生と候生が始皇帝に対する不満を述べたもの(記事f)である。特に、後者の「意得欲従、以_レ為、自_レ古莫_レ及_レ己。」の一文に注目したい。「その意欲す

るところはすべて思いのままになったので、古今を通じて自分に及ぶ者はないと思ひ込んで」と、皇帝としての始皇には「権力者」としての自信に奢りがあつたことがうかがえる。

一方の大伴御行である。『竹取物語』に語られる大伴御行の人物像については、以前拙稿^⑩において本話冒頭の記述を根拠に次のように指摘した。

登場時の大伴御行は、「統率力」と「財力」を二本柱とする「権力」を有し、家臣の「願はむことをかなへ」られる絶対的な存在であった。彼は「武門の棟梁」として、また「支配者」として絶対の自信に満ち溢れ、他者の意見を聞き入れない、独断専行的人物として造型されているといえる。

以上のようにまとめると、両者の人物造型が非常に似通っていることが理解できよう。確かに、皇帝と大納言という大きな身分差はある。しかしながら、『竹取物語』に記される御行の言動は、その身分以上に「独断専行」の「支配者」を感じさせる。家臣の願うもの全てを叶えられるという態度には「権力者としての自信」に奢るさまも読み取れるのである。

このように『竹取物語』と「秦始皇本紀」の類似は数多く、もはや偶然の一致の範疇を明らかに超えているといつてよい。『竹取物語』「竜の頸の珠」難題譚は『史記』「秦始皇本紀」を典拠とし、モチーフを撰取して成り立っているのであった。ゆえに、「竜の頸の珠」を入手不可能な宝へ変質させた「障害物を力によって排除す

る」というモチーフも、やはり「秦始皇本紀」からの摂取によるものと判断できるのである。

三 『竹取物語』の方法

『史記』は、紀伝道の教科書として『文選』とともに指定されており、広く普及した漢籍である。したがって、それなりの知識人であれば、『竹取物語』「竜の首の珠」難題譚と『史記』「秦始皇本紀」の類似を見抜くことは可能だったと推測できる。いや、むしろ「竜の頸の珠」難題譚は、「記事」にも「人物」にも類似・共通点を多数見出せるところから「秦始皇本紀」と重ねられ、重層化されて読まれたのではあるまいか。作者が知識人に向けて本話を書いたのだとすれば、作者の想定する読者は「大伴御行」の背後に、ごく自然に「始皇帝」の姿を幻視したに違いあるまい。しかしながら、御行に与えられた結末は始皇帝のそれとは決定的に異なるものであった。

(1) 生死を分かつもの

先に確認した通り、「御行」も「始皇帝」も、航海を終えた時点で共に「発病」している。しかし、その後の両者にはそれぞれ「生」「死」という異なる結末が用意されていた。二人の生死を分けたものは何であったのだろうか。

『竹取物語』「竜の頸の珠」難題譚の方法 (伊澤美緒)

「秦始皇本紀」には、始皇帝の死因について一切記されていない。(在位36年、始皇帝に対し死の予言がみられるが、そこには死因についての言及はない。)とはいえ、発病の直前に置かれる記事が「巨魚の射殺」である。「射殺」と「発病」の間の因果関係は証明できないが、文脈からは関係性が窺われる。再度、「秦始皇本紀」本文を検証しよう。以下は、出航直前に始皇帝の見た夢についての記述である。

始皇夢與海神戰、如人狀。問占夢博士。曰、水神不可見。以大魚蛟龍為候。今上禱祠備謹。而有此惡神、當除去。而善神可致。乃令下入海者齋中補巨魚具上、而自以連弩一候大魚出射之。

アマミカケした一文に注目したい。始皇帝の夢に対し、占夢博士は「水神は見ることはできない。大魚蛟魚をもってその兆候とする。」と答えている。つまり、「大魚蛟龍」「巨魚」は、「水神」の化身(兆候)と理解されたのである。その理解を持ちながら始皇帝は、自ら「巨魚」を射殺さんと船出をした。助字「乃」(二重傍線部)は意外性をあらわす用字であるから、「巨魚」||「水神」と理解してもなお、それを射殺しようとした始皇帝の行動は、筆録者にとっても驚異すべきものであったことがわかる。このような蓋然性から、始皇帝の死には水神の化身とみられる「巨魚」射殺が関与すると推測されるのである。読者が「巨魚射殺」と「死」に因果関係を読み取るとは自然な理解であるといえる。網谷氏はこれについ

て「一匹の巨魚を殺しただけで、平原津で始皇帝は病になり、やがて死に至るのである。」と、「射殺」と「発病」そして「病死」に積極的な因果関係を認めている。

ではなぜ、御行は発病しても死ななかったのだろうか。御行が遭遇した大嵐は、本文Dで確認した通り「竜を殺そうとした」ために「竜がおこした」ものであった。御行は自分が発病しても死ななかった理由について帰参した家臣以下のように述べている。

F. 大納言、起き居てのたまはく、「汝ら、よく持て来ずなりぬ。

竜は鳴る雷の類にこそありけれ。それが珠を取らむとて、そこに人々の害せられむとしけり。まして竜を捕らへたらましかば、また事も無く我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。かぐや姫てふ大盗人の奴が、人を殺さむとするなりけり。家のあたりだに、今は通らじ。男どももな歩きそ」とて、家に少し残りたりける物どもは、竜の珠を取らぬ者どもに賜びつ。

御行の見解をまとめると、「竜は雷神の仲間だ」「珠を取ろうしたから殺されそうになった」「竜を捕まえていたら、きっと殺されただろう」となる。本文Fでは「竜を捕らへ」たらと御行は言っているが、本文C・Dで確認したように、ただ「捕まえる」意ではなく「竜を殺す」意を含んでいるのは明らかである。『竹取物語』においては「竜」＝「雷神の仲間」であり、その「射殺」と「生死」には因果関係が存するのである。

「秦始皇本紀」では決して明確には示されない「巨魚（水神の化

身）の射殺」と「死」の因果関係を、『竹取物語』は明確に設定し利用している。「殺さなければ死なない」という解釈のもとに、典拠が変更されたのである。

(2) 典拠変更の効果

「竜の頸の珠」難題譚において典拠の変更が行われたのは「秦始皇本紀」だけではない。『莊子』も同様である。疑問の出発点となった「竜の頸の珠」という入手可能な宝が、入手不可能な宝へ変質することも典拠の変更といえる。

漢文の修辭法に「典故」という技法がある。これは、字句の過去の話柄（古典に存する言辭や故事、歴史、伝説など）を用い、文意を重層化する技法であるが、「表現者」「享受者」双方に「典故」の原典理解が求められる。原典への共通理解があるからこそ、文意の重層化の妙を味わうことができるのだ。『竹取物語』（「竜の首の珠」難題譚）における漢籍利用についても同様のことがいえよう。

原典を熟知する読者が、「竜の頸の珠」難題譚を享受した時、これらの典拠の変更は効果的に機能するのである。

たとえば、「竜の頸の珠」という難題に対して、『莊子』における「竜の頸の珠」のイメージが重ねられれば、読者に「大伴御行こそ難題物を手に入れ、かぐや姫と結婚するのだろう」という期待が生じる。また、「大伴御行」に「始皇帝」の姿が重ねられれば、読者は「始皇帝と同じように御行は死ぬのだろう」という予測を抱くこと

になる。しかし、物語は決してそうはならない。「竜の頸の珠」難題譚は、典拠によって物語の展開を読者に期待させる一方、その期待通りには物語を展開させない。ここで典拠改変は読者の思惑を見事に覆す効果を發揮するのである。

物語は典拠から撰取したモチーフをふんだんに織り込むことによって：典拠との類似・共通点を多く示すことによって、読者に強く原典を意識させる。その上で、いわば読者の意識を逆手にとつて、典拠の改変による「新しい物語」を展開させてゆく。これこそが『竹取物語』の典拠利用の方法なのである。

おわりに ——『竹取物語』の“構造”と“方法”——

『史記』『秦始皇本紀』は『竹取物語』の典拠として積極的に認定すべきものである。本稿が明らかにした「竜の頸の珠」難題譚における「秦始皇本紀」撰取の実相は十分にその根拠となろう。『竹取物語』の「竜の頸の珠」が入手不可能な宝へと変質した理由が『史記』『秦始皇本紀』からのモチーフ撰取のゆえであることを改めて指摘しておく。「障害物を力で排除する」というモチーフの付加によって、「竜の頸の珠」は決定的に変質したのである。また、「竜の頸の珠」難題譚では典拠の改変によって、読者の予想を覆すという典拠利用がなされていることを述べた。したがって、「秦始皇本紀」撰取の多さは、読者により強く典拠を意識させようという

仕掛けであるということが出来る。

最後に、「竜の首の珠」難題譚の“構造”と“方法”の関係について私見を述べ、本稿の結びとする。

「竜の頸の珠」難題譚の構造上の特質は、「先行求婚譚のモチーフを撰取・襲用して新たな物語展開を導く」、また「転落」と「喪失」の構造を有し、それが冒頭と結末の対照的呼応関係によって鮮明化されている^②というものであった。本稿で明らかにした「竜の首の珠」難題譚における典拠利用の方法は、この構造的特質を強化する役割を持っているといえる。まず、漢籍の撰取と利用は、その改変によって「新たな物語展開を導く」ことに有機的に結びついている。また、「大伴御行」の背後に、この世の栄華を極めた「始皇帝」の姿を透かし見れば、権力者の「転落」と「喪失」という物語構造が一層際立ってくるのだ。

なお、『竹取物語』において、読者の期待を逆手にとって物語を展開させるといふ方法は、五話目の難題譚（末子相続を期待させるが、失敗に終わる）や、富士語源譚（不死薬焼却から「不死」の名が期待されるが、「土に富む」を正解として提示する）にも共通するものであることを付記しておく。

注

- (1) 上坂信男『竹取物語全評釈 本文註釈篇』(右文書院 一九九九年)をはじめ、新潮古典集成『竹取物語』(野口元大訳注 新潮社 一九七九年)、新編日本古典文学全集『竹取物語』(片桐洋一校注 小学館 一九九四年)、新日本古典文学大系『竹取物語』(堀内秀晃校注 岩波書店 一九九七年)、角川ソフィア文庫『新版 竹取物語』(室伏信助訳注 角川書店 二〇〇一年)など主な註釈書の脚注・頭注に指摘される。
- (2) 網谷厚子『竹取物語に投影する『史記』——日本文化交流の一つとして——』(『解釈』三八一六 一九九二年) なお、網谷氏の論では、「竜の頸の珠」難題譚のほかに、かぐや姫昇天の段の警護の人々に始皇帝のパロディが読み取れるとの指摘もある。
- (3) 新釈漢文大系『莊子 下』明治書院 一九六七年 *なお、旧漢字は私に通行字体に改めた。
- (4) 以下、『竹取物語』引用本文はすべて角川ソフィア文庫『竹取物語』(前掲)によった。
- (5) 網谷厚子『もし天竺にたまさかもて渡りなば——竹取物語の難題譚の再検討——』(『中古文学』第四十四号 一九九〇年)
- (6) 新釈漢文大系『論衡 上』(王充原著・山田勝美著 明治書院 一九七六年) *なお、旧漢字は私に通行字体に改めた。
- (7) 新釈漢文大系『史記 一(本紀)』(吉田賢抗校注 明治書院 一九九三年) 以下、『秦始皇本紀』本文はすべて同書によった。*なお、旧漢字は私に通行字体に改めた。
- (8) 注(2)におなじ。なお、網谷氏のいう五つの類似点とは、以下の通りである。始皇帝の場合：A「徐市等を頼りとせず」↓B「自ら石弓を
- もって」↓C「大魚蛟龍を得ようとす」(大魚蛟龍は「水神」の化身) ↓D「失敗」↓E「病になる」(↓死) / 御行の場合：A「家来たちを頼りとせず」↓B「自ら弓を持って」↓C「龍を得ようとす」(龍は「鳴る神」の類) ↓D「失敗」↓E「病になる」
- (9) 新釈漢文大系『列子』(小林信明著 明治書院 一九七六年) *なお、旧漢字は私に通行字体に改めた。
「其中有五山焉。一曰、岱輿。二曰、員嶠。三曰、方壺。四曰、瀛州。五曰、蓬萊。：(中略)：珠玕之樹皆叢生、華実皆有滋味、食之、皆不老不死。所入之人、皆仙聖之種：(以下略)」
- (10) 拙稿『竹取物語「竜の頸の珠」難題譚の構造』(『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—』第二十八号 二〇〇三)
- (11) 『延喜式』大宰寮「凡応講説者。禮記。左伝各限七百七十日。周禮。儀禮。毛詩。律各四百八十日。周易三百一十日。尚書。論語。令各二百日。孝經六十日。三史。文選各准大經。公羊。穀梁。孫子。五曹。九章。六章。綴術各准小經。三開。重差。周髀各准小經。海嶋。九司亦共准小經。」(新訂増補國史大系『延喜式』吉川弘文館 一九七九年)
- (12) 注(10)におなじ。